

無題

サイクリング部3年
生・機・工学科2年

山口晋二

始めに・・・

今回部誌の原稿を書くにあたって、何を書こうかといろいろ考えてみたのだが、なかなか良い案が浮かばず、結局、サイクリング及びサイクリング部に全く何の関係もない小説(小説と呼べるかどうかは非常に疑問ではあるが)を書いてみることにした。何と云っても小さい頃から作文の大嫌いだっただ私が書くのだから、くだらないものになる事は必至であるので、このTOP & LOWを読破しようと思込んでいる人以外には読まないことをお勧めする。

次に・・・

原稿の原稿を書き終えてから題を何にしたらよいかを一生懸命考えたのだけれど良い題がみつからず、結局「無題」とごまかしてしまった。従ってこの題には別に何の意味もないので、急のため・・・

それから・・・

この小説はフィクションであり、登場する人物、学校等はすべて架空のものであり実在しないので、これも急のため・・・

それでは、麦みそラーメンおまちかね。 何のこっちゃ!!

「コウスケー、コウスケッ!! 早く起きなさい。遅れるわよっ!」

10月にしては寒い朝であった。愛知県立岡崎西高校3年8組の田島浩介は、毎朝7時にこうして母の声で目を覚ます。しかし一度起こされたくらいでは起きていかない。とくにこんな寒い朝は1分1秒でも長く布団に入っていたいのが人情である。そうしてしばらく布団の中で丸くなっていると、決まって次に

「コウスケ、コウスケー! コウスケッ!!」

姉が起しに来る。姉はいつも名前を呼ぶだけである。浩介はこのコウスケコールに再び目を覚ますと、家族中に呼びすてにされる自分がとてもみじめに思えて来た。

やがて彼は決心を固めて布団から飛び起きると、パジャマのまま台所へ行き自分の席に着く。朝食は皆バラバラで、いつも浩介が最後である。父などはもう会社に出かけてしまっていてその辺には居ない。浩介はねぼけたままハシをとり御飯を口の中に押し込むと、それをかみながら味噌汁を口の中に含み胃の中に流し込む。

「コウスケ、お豆さんもあるわよ。」

台所の中をなにやら忙しそうに歩き回りながら母が言った。

「なにが『お豆さん』だ! 自分の息子を呼びすてにしておいて、こんな豆ごときに『さん』をつけ、御丁寧に『お』まで

つけて……」

浩介はまだ半分ねぼけた頭でそう考え、母にそれを告げると、母はあきれた顔をして、発想がユニークだから小説家にでもなったら、と言った。浩介は、数学や物理の成績はずばぬけて良かったが、国語や社会の成績はずばぬけて悪かった、だから彼は、その母の言葉を皮肉としかとれず、もしそうでなければ、自分の息子の適性というものを全く考えたことのないどうしようもない母親だと思った。

朝食が終わるともうすっかり目が覚めていて、テレビを見ながらのんびりと着替を始め、着替え終わるとゆっくりトイレに入り、それから顔を洗う。浩介が顔を洗い終わると、もう母と姉が出かける時刻である。母と姉は同じ会社に勤めており、毎朝一緒に白いシビツワに乗って出勤する。

女僕が出かけてしまった後は、家の中は浩介ひとりである。浩介はいわゆるカギツコなのである。帰りは浩介が一番早いので、学校へ行つたふりをしてさぼることも可能であるが、後でばれるとやばいし、別にさぼりたいとも思わないので、毎日まじめに学校に通っている。

浩介は学生服を着て応接間のソファに深く腰をおろし、ノートと教科書が一冊入っているかいないかのパッチャンゴのカバンと弁当箱の入った布製の袋を横に置いて、テレビを見る。毎

朝、7時45分から始まる「カリキュラムシーン」を見てから家を出るのである。これは幼児向けの教育番組であるが、非常におもしろく、また、たまに知らない事もでてくるので、浩介は毎朝かかさず見ている。

7時57分、「カリキュラムシーン」が終わると、浩介は、テレビのスイッチを切り、カバンと弁当を持って玄関のカギをしめ、高2のときに買った、ドロップハンドル、10段変速の自転車にそれらをしばり付けて、またがる。その間、約2分30秒。

学校までのおよそ10キロメートルの道のりを、毎朝決まったコースで軽快につっ走る。安城市から岡崎市に入って矢作川を渡ると急に信号が多くなる。とは言っても大きな信号は3つだけで、それらの間にある小さな信号は、波に乗ってしまえばパスできるのであまり苦にはならない。こうして学校の正門に入り、あせって走っている生徒たちをゴボウ抜きして自転車置場へと走る。自転車にまたがってから、自転車置場に到着して自転車から降りるまでの間、29分30秒^{+1分}-30秒。

今日は30分30秒かかったらしく、もうすでに8時半の始業のチャイムが鳴っていた。浩介は急いでカバンと弁当を自転車からとりはずし、教室へとダッシュした。途中、先生を3人程追い抜いて教室に飛び込んだ。

「ふー！ 間にあった。」

毎朝こんな調子で浩介は登校する。ところが不思議なことに今だに無遅刻であった。しかもさらに無欠席無欠課であって、二年半の間皆勤である。あと半年これを続ければなんと皆勤賞なのである。浩介はひそかにそれを意識していた。

教室は当然の事ながらまだ騒がしかった。教室の後ろでは、いつものように青田篤たちがふざけあっている。篤は小柄であるが、髪をオールバックにして、かなりつっぱった格好をしている。そして、仲間からはいつも「トク」と呼ばれている。浩介はあまりつっぱっている方ではないが、学校に居る間は彼らと一緒に居る時間が多い。まじめな奴らとまじめな話をしてより、彼らと冗談を言い合っている方が楽しいからである。

浩介が息をきらしながら自分の席に着き、カバンを机の横にたてかけ、教科書やノートのいっぱい入っている机の中に弁当を押し込むと、さっき土間のところで追いついた担任の田辺が入って来た。席を離れていた連中がバタバタと自分の席に戻り、あっという間に静かになる。浩介の隣の席の太多文昭もトクの仲間のひとりで、汗をかいて戻って来た。彼は「フミ」と呼ばれている。浩介とは一番親しかった。

田辺は出席をとり、連絡事項を簡単に伝えると、すぐに出て行った。とたんにまたざわつき始める。

「今日は・・・月曜日か。」

と若介はひとり言を言いながら、1時間目の数学の問題集とノートを机の中からひっぱり出して机の上にバサッと置いた。もう受験が近いので授業で問題集をやっているのである。

「きのうさあ、」

フミが若介に話しかけたとき、数学の教師浅井が入って来た。教室に再び静けさが戻る。

若介の席は廊下よりの一番後ろで、教室中を見渡すことができる。いつ見ても殺風景だなあ、と若介は思った。1学年9組まであって、6組から9組までは理系であり、女子は少ない。これは当然の事なのであるが、問題は、この少ない女子が6組にかたよっているということである。量的にも質的にも!! 7、8、9組にはそれぞれ8人ずつしか居ないが、6組には14人も居る。しかも、良質のものがその14人の中にほとんど含まれていて、7、8、9組の計24人はカスばかりなのである。さらに悲しい事に、1組から6組までと7、8、9組とは校舎が別で、めったにお目にもすらかかれな。若介はたまに何か用があって文系の方の校舎に行くと、よその学校にまぎれこんでしまったような気さえして、いたたまれず、用を済ませるとすぐに自分の校舎に戻って来てしまうのである。数は6組の男子道をどれほどねたんだ事か。理系でありながら女子に囲まれて勉強がど

きるなんて！　そして、その憎きら組の担任が、今日の前に居る球井なのである！！　この事はすべて球井の陰謀なのではないかと浩介は思った。だから、浩介は球井の顔を見るたびに腹が立つのであった。

やがて、1時間目の終わりを告げるチャイムが鳴り、球井は去って行った。しかし次は、最も恐怖の授業、沼部のGRAMMARである。沼部はすぐ怒ることでも有名で、浩介にも苦い思い出がある。

浩介らが入学して間もない頃の事である。体育の授業に出るために、教室で着替をすませた後、体育館に向かって歩いていたら、と、突然、よその組の教室からカバのような顔をしたのが飛び出して来てどなった。

「なんだ、おまえらは！！」

「・・・あのお、体育の授業で体育館に行くところなんですけど・・・」

ちょっと間をおいて、ひとりが答えた。すると、そのカバは、

「もう授業が始まってるんだぞ。ガヤガヤガヤ廊下を歩くな。体育になんか行かんでいい！　しゃべった奴は1時間中見こに立っしれ！！」

と、どなりちらした。浩介は幸いひとりで歩いていたので、潔白だと自分に言いまかせて体育に出たが、立たされた連中は、

とうとう本当に1時間中立たされていたのであった。

自分の授業で生徒を立たせるというのはよくある話だが、他の教師の授業の生徒を立たせるというのは聞いたことがなかった。そして、このカバが後で、沼部という英語の教師であることがわかったのである。第一印象が強烈だったためか、浩介は今になってもこの沼部の授業だけは緊張してしまうのであった。

長い長い2時間目が終り、この緊張感から解放されると、浩介はいすに腰かけたまま大きくひとつ背のびをした。

浩介は、2時間目と3時間目の間の10分の休憩時間に弁当を全部食べてしまうのが常であった。いわゆる早弁であり、昼休みにはパンを買って食べるのである。中には授業中に教師の目を盗んで早弁をすす奴も居るが、浩介は、ヒヤヒヤしながら食べてもうまくなく、消化にも悪いし、弁当ひとつ食べるのに10分もあれば十分だと考え、いつも休憩時間に食べていた。

彼は、沼部が教室から出て行ったのを確認してから、机の中から弁当と3時間目の世界史の教科書をひっぱり出して、GRAMMARの教科書とノートをしめた。今日は、あの緊張感のせいか、いつもに比べあまり食欲はなかったが、彼にとって早弁はもう完全に日課のひとつなのであった。

浩介が弁当を食べ終わると、間もなくチャイムが鳴って、世界史の教師川島が入ってきて来た。お茶を飲みたい、と思いながら

浩介は教科書を聞き、この時間何をしようかと思いをめぐらす。彼は東京興業大学志望で、その受験科目に社会科はなく、だから世界史はどうしてもいい授業なのである。無論、東興大志望だから社会科がいらないのではなく、苦手な社会科が受験科目にないから東興大を志望したのではあるが。そして、この世界史の教師川島はその辺の所に理解が深く、授業にせしつかえたり、人に迷惑がかからない限り、寝ていようと何をしていようと、いっこうに何も言わないのである。

浩介はしばらくポケーとして授業を聞いていたが、すぐに退屈がたまらなくなり、机の中から24色入りの色鉛筆を出してそれをひざの上に置きふたを開けた。そして、教科書に載っている白黒の写真を、色を選んではぬり始めた。これは浩介が中学校のときにやはり社会科の時間に自分で発見したもので、教科書などによく載っている白黒の写真の色鉛筆でぬるとカラー写真のようになるのである。小学校のときから社会科が嫌いだっただ浩介は、社会科の時間にそんな事ばかりして暇をつぶして来たのだ。

3つ程白黒写真をカラーに変えると、浩介はこのぬり絵ならぬぬり写真をやめ、色鉛筆をしまった。あまり長いことやっているとな隣のフミにバカにされるのである。

再び暇になった浩介は、両手でほおづえをついて、またポケー

一として授業を聞いた。この授業さえ終わってしまえば、もう
昼休みみたいなものだ、早く終わってしまえと浩介は思った。
朝、担任の田辺が4時間目の化学は自習だと言っていたのであ
る。

川島は、浩介の知らない人の名前や地名などをとこざとこざ
にありこんでしゃべり続けている、昔の人の名前なんか覚えて
何の役に立つのだらうと浩介は思った。まだこの学校のかわい
い女の子の名前を覚えた方が楽しいし、何かのときに役に立つ
かも知れない。

それでも三分の二くらいの生徒は、川島の授業を真面目な顔
をして聞いている。浩介のななめ前の遠藤は、何やら物理の問
題を一生命懸命解いているようだ。彼は学年で10本の指に入る
優等生で、名古屋大学の医学部を受けるらしい。しかし、浩介
は、物理と数学では彼に負けない自信があった。

廊下の窓の外には青空が広がっていた。雲ひとつない見事な
秋晴れである。朝は少し冷え込んだが、今はポカポカとして、
とても気持ちがいい。

浩介は列車に揺られながら、窓の外の流れ行く景色を眺めて
いた。

「ここ、よろしいですか。」

女性の声に振り返ると、なんと6組の伊藤美佐子が微笑んで立

っている。浩介は驚いて横に置いていた自分の荷物を足元に降
ろすと、彼女は彼の隣にすわった。伊藤美佐子は小柄で、笑う
とえくぼができて、浩介の好みのタイプのひとりである。その
後、いろいろな会話を交し、楽しい時が流れた。彼女は浩介の
部屋のいすに腰かけている。ふと、二人の会話がとぎれた。浩
介は小声で彼女の名前を呼び、彼女に考み寄った。彼女は驚い
たような顔をして立ち上がり、浩介が彼女の肩を抱こうとす
ると、振り向いてかけ出して行ってしまった。浩介は彼女の名前
を呼びながら追いかけてみようとしたが、足が思うように動かない。
彼女の後ろ姿がどんどん小さくなっていく。

「終わったぜ。」

突然浩介の頭の上でフミの声が出て、それと同時にざわめき
が耳に入ってきた。浩介が目を開けるともう世界史の授業は終
わっていた。変な夢を見たものだと思いながら浩介は、枕にし
ていてしびれた右腕をさすり、わいっばいあくびをした。トク
たちはもう教室の後ろでふざけあっている。浩介とフミは世界
史の教科書を机の上に出しゃばなしにしたまま席を離れ、すぐ
後ろの壁にもたれて話し始めた。

4時間目が始まって教室の中は依然として騒がしかった。
半分くらいは机に向かって何やらそれぞれ勉強をしていて、受
験が近づいていることを表しているが、他の半分は隣同志で話

をしたり席を離れて遊んだりしている。寝ている者もいる。浩介とフミはやはり後3の壁にもたれて話をしている。トクたちも後3で遊んでいる。

と、突然、後3の扉がガラッと勢いよく開いた。沼部だ!! 一瞬のうちに殺気を感じとって、席を離れていた連中がササッと席に戻る。遠く離れていた者は、まるでいすとりゲームのように空いている人の席に着いたり、しゃがんだり机や人の影に隠れたりした。しかし、あわれかな。浩介とフミはあまりにも後3の扉に近いところに居たので、すぐ目の前に自分の席がありながら、蛇ににらまれたカエルの如く身動きもとれずじっと後3の壁にへばりついたままであった。

「何だ。貴様らは! 自習の時間くらい静かに勉強できるのか!! 受験は近いんだぞ! 席を離れとったやつは廊下に出て立っとなれ!!」

そうになると沼部は出て行った。それに続いて浩介とフミが廊下に出て並んで立って、後3で遊んでいたトクたち4人がぞろぞろと出て来た。

隣の9組が沼部の授業だったとは、うかつであった。それにしても、浩介は、席を離れていたのに廊下に出て柔ない連中が腹立たしかった。

昼休みは最高に騒がしい。昼食を終えると5時間目が始まる

まで思う存分遊ぶのだ。しかし今日は、トクが9組の教室に遊びに行っているののでいつも程は騒がしくなり、浩介は、フミとルウと3人で野球をして遊んだ。野球といっても、教室の中でほうきをバットにして発泡スチロールで作った球を打つのである。ルウというのは足立明のニックネームである。彼は中学のときは相当勉強ができたらしいが、高校に入ってから墮落の一途をたどった。そんなときに古文の授業で「る」の脱落というのが出てきて、それ以来彼はルウと呼ばれるようになったのであった。

しばらくして、ルウがいいことを思いついたと言って、トクの机を廊下の方へ運び始めた。何をするのか聞くと、

「7組の教室に持っていくんだよ。」

と答えた。

「おもしろえ！」

浩介とフミも手伝って運んだ。

さて、いよいよ5時間目の始まりを告げるチャイムが鳴り、トクが教室に戻ってきた。

「ウオ!? ウオオ——!? オレの机が!! オレの机が!!」

トクはそう叫びながらあたりを見回した。

「ああ、おまえの机ならさっき7組の教室で遊んでいたぜ。」
ルウが真面目な顔をして言うと、トクはあわてて7組の教室へ

走って行った。7組の教室ではもうすでに現国の授業が始まっていた。女教師の佐々木が教壇の上で何やらしゃべっている。佐々木は25、6才で未婚であり、顔はまずくはないがそれほど美人でもないという程度で、スタイルはまあまあであった。トクは自分の机の位置を確認すると、後ろの扉をそっと開けて、はいつくばってなんとか机のところまでは無事にたどりついた。しかし、しゃがんだままでは重たい机を運んで行くことはできない。トクは佐々木が黒板に向かっていている間に立ち上がり、運び出そうとしたが、見事失敗に終わった。

「んまあ、青田君！ あなたそんな所で何をしてるの!？」

クラス全員が後ろを向いてトクに視線を集めた。

「あの、ぼくの机がこちらに遊びに来ていたもので……」

爆笑の渦が8組の教室まで聞こえて来た。ルカ

のる人は笑った。そして、ひどいことおわび……

机を運んで帰った。当然話はまじまた続くのですが、原稿のメドに間にあいませんでしたので、いちおうここまでというところで、カンニン、カンニン、万一この先が読みたいという方がいましたら筆者まで申し出て下さい。いやあ——ハハハハハハ、しかし、最後まで読む人はまずいないと思ったのになあ。たいした、たまげた。